連載　おもしろ浮世絵講座・江戸人の遊び心②

造型のマジック

中右瑛

ジグゾーパズルの嵌め絵

「としよりのよふな若い人だ」　歌川国芳画

「顔」を形づくっている子供のひとり

造型の魔術師・国芳のもう一図をご覧頂こう。

手に猪口を持ちお酒を飲もうとしている珍妙な女性。「としよりのよふな若い人だ」の題名も、変わっている。この女性の顔や手のポーズも少し変だ。よくよく見れば、この絵も前回紹介した絵と同じように人物の寄せ集めで構成された「嵌め絵」と呼ばれるもの。

髪の毛は、縞の着物を着た三人の女性。顔や手は、裸の子どもたちの組み合わせ。キモノはどてらを着た子どもたちが折り重なり、女性の首辺りに、小さな手が描き込まれている。

眉毛は、なぜか？鎌。目は、子どもの頭。口は、団扇らしきようなもの。簪（かんざし）には提灯がぶら下がっている。子どもが主体となっているうえに、鎌や赤提灯？が描かれており、何か？意味がありそうだが、まったく不明。絵師・国芳のメッセージがあるのかも知れない。江戸の戯画には、時局、教訓の複雑な意味が込められ、難解なものが多い。

背景には、教訓的な言葉が書き添えられている。

いろいろな人が　よって
わたしのかほをたてて　おくれで
誠にうれしいよ
人さまのおかげで
よふよふ人らしい　かほになりました

多くの人たちによって、人間は支えられている。人さまのお陰で、自分も人間として成長できた、と国芳センセイはのたまう。苦労人・国芳らしい教訓だ。弘化４～嘉永５（１８４７～１８５２）年頃、藤岡屋から出版された。

庶民を苦しめた天保改革（１８４１年～）の直後に発表された作品であるので、幕府批判が込められているのかも知れない。

国芳は、「武者絵」「風景画」「美人画」などなんでもござれ、幕末浮世絵界で八面六臂の大活躍。それに反骨精神旺盛で、時には時局を茶化し、政治を批判したパロディ精神を大いに発揮し、珍奇なアイ

ディアを次々に披露し、自ら「戯れ絵師」と称して、「奇想」と「夢」を生み出した奇才の浮世絵師なのだ。

この絵も「寄せ絵の面白さ」、「造型の不思議さ?」を狙った「嵌め絵」の代表珍作。

近年、国芳絵について、近代画法、発想の現代性から高い評価がなされ、コレクター仲間では最も人気が高い。

■中右瑛（なかう・えい）
抽象画家。浮世絵・夢二エッセイスト。
一九三四年生まれ、神戸市在住。
行動美術展において奨励賞、新人賞、会友賞、行動美術賞受賞。浮世絵内山賞、半どん現代美術賞、兵庫県文化賞、神戸市文化賞など受賞。現在、行動美術協会会員、国際浮世絵学会常任理事。著書多数。

「としよりのよふな若い人だ」歌川国芳

《飛鳥II》の12F・スカイデッキ・プールサイドからのORIENNTAL HOTEL

海船港（フネ）

《飛鳥Ⅱ》船上で エクセレントなパーティー

文・写真　上川庄二郎

【《飛鳥Ⅱ》が神戸港・中突堤に、お披露目初入港】

昨年（二〇〇六年）一月十一日にリニューアル・オープンした中突堤客船ターミナル。寄港第一号となった《飛鳥》は、この日がさよならクルーズとあって、大勢のファンに見送られて旅立った。

次いで、三月四日には、《飛鳥》の後継船である《飛鳥Ⅱ》がお披露目で初入港した。この船は、《クリスタルハーモニー》の改装船であることは、本誌の昨年五月号でも紹介した。大きさは先代《飛鳥》の倍近い五万トン級のクルーズ船である。メリケンパークの前にその偉容を見せたとき、これで日本にも本格的なクルーズ時代が到来するのかな、と思ったものである。

【《飛鳥Ⅱ》で船上パーティー&ディナー】

さて、次号で〝中突堤リニューアル・オープンから一年を振り返る〟を取り上げることにしているので、今回は、昨年暮れに行なわれた《飛鳥Ⅱ》船上パーティーをご紹介するとしよう。

初年度にしては賑わいのうちに一年を終えることにしていることとなり、暮れの十二月に入って《飛鳥Ⅱ》や《にっぽん丸》《ふじ丸》とひっきりなしに九回も入港（中突堤滞在十一日）し、クリスマス・ワンナイトクルーズで賑わった。

その中でも特上の催しが、アスカクラブの会員の中から抽選で選ばれた二〇〇名を対象にした《飛鳥Ⅱ》のクリスマス・パーティーである。

夕闇にひときわ映える《飛鳥II》後部デッキ

時は昨年十二月十日の夕べ、中突堤に停泊している《飛鳥Ⅱ》船上で、旧知のクルーズ仲間たちと談笑しながらの楽しいひととき。

まずは、十一階のパームコートで船長主催のウエルカムパーティー。

ドリンク・サービスと華やかなミュージック・ショーに続いて、往年の名船長だった野崎利夫さんの「長い間《飛鳥》とともにご贔屓くださったアスカクラブの皆さん、ほんとうに有難うございました。今は、皆さんと共に航海した数々の思い出で胸が一杯です。これからも《飛鳥Ⅱ》をよろしくお願いします」とやや固めのお礼の挨拶に始まり、末永守船長のジョーク交じりの「次回は、是非とも動いている船で皆さんと再会させていただきたいと思っています。《飛鳥Ⅱ》と共に末永を末永くよろしく!」の挨拶に一同爆笑。次いで機関長もまた「私ども何も船（せん）長、何も機関（聞かん）長ではございません。精一杯皆さまのおもてなしに務めさせていただきます」とユーモアたっぷり。一気に和やかな雰囲気に…。

引き続き会場をメイン・ダイニングに移してクリスマスディナー。私たちは、思いがけず末永船長ご夫妻のメイン・テーブルだった。

《飛鳥Ⅱ》で世界一周をした方や、ワールド・クルーズで南極に行かれた方なども いて話題には事欠かない。これからのクルーズのことなど互いに楽しく話しが弾んだ。

若干気になったのは、「何故、《飛鳥Ⅱ》を足の便の今一つ良くない中突堤に着けるのですか?」という船長への質問で、船長はさりげなく「中突堤をリニューアルされた神戸市さんからの要請もあって、《飛鳥Ⅱ》は中突堤に着けることにしています」と返答してこの場はけり。しかし、こんな素朴な指摘に応えるためにも、この課題解決に向けた前向きな手を打ってほしいものだ。

ディナーの後は、大ホールでのショータイムと続く。まさに癒しのひととき。写真撮影禁止とあってその場面を紹介できないのが残念だ。

あっという間に下船タイム。だから船旅は、せめて、三、四日は欲しいところ。

団塊の世代が引退するここ二、三年でクルーズ人口も爆発的とはいわないまでもかなり増加するのではなかろうか。こんな思いを《飛鳥Ⅱ》に期待しながら、名残尽きない船を後にした。

■かみかわ　しょうじろう
1935年生まれ。
神戸大学卒。神戸市に入り、消防局長を最後に定年退職。その後、関西学院大学、大阪産業大学非常勤講師を経て、現在、フリーライター。

ウエルカム・ミュージック・ショー

野崎利夫元《飛鳥》船長

スタッフの紹介と併せ、末永守船長の挨拶

震災エッセイ㉒ ―被災した神戸だから伝えられること

後ろめたさの力

大谷　成章（フリーライター）

剪画／とみさわ かよの

海外災害援助市民センター（CODE）の代表理事の芹田健太郎さん、アートサポートセンター神戸代表の島田誠さん、被災地NGO協働センター代表の村井雅清さんたちに共通しているものがある。

加えて言えば、地元NGO救援連絡会議を立ち上げた草地賢一さん、週末ボランティア代表の東條健司さん、被災地障害者センター事務局長の大賀重太郎さん、長田の御蔵5・6・7丁目まちづくり協議会代表だった田中保三さんたちにも共通しているものがある。

12年前のあの日、あの瞬間に神戸にいなかったか、または被害が少ない場所にいたのだ。

芹田さんは、そのとき神戸大学大学院教授で、学生たちと信州のスキー場にいた。島田さんはヨーロッパからの帰りで、韓国・金浦空港の待合室にいた。

村井さんと草地さんは北区に住んでいて、被害は軽微だった。東條さん、田中さんは須磨区の北部。大賀さんは姫路に住んでいた。

救助・救援の組織をつくり、いまも復興活動を続けているこの人たちは、震度7を体験していない人たちだ。

芹田さんは「そのとき、その場にいなかったのが負い目として感じられる」と、大震災の年の年末に数千人が集まって開いた「市民とNGOの『防災』国際フォーラム」の実行委員長を引き受け、それがいまCODEに発展している。

島田さんは、そのとき海文堂書店の店主で、1週間後に店を再開させると客がつめかけ、「がれきのまちでも文化を求める人たちがいるのだ」と感動した。「たまたま不在で生き残った後ろめたさを、助ける側に回って解消しなければ」とアート・エイド・神戸の活動を始めた。

草地さんは、鈴蘭台の自宅から再度山を経由して三宮に出て、YMCAの玄関に立ち「多くのボランティアが駆けつけるはず。そのコーディネートが必要だ。それを私が開始する」と宣言した。草地さんは、その後、NPO法の制定に力を尽くし、姫路工業大学環境人間学部（現・兵庫大学）

の教授になってボランティア論を講義していていたが、2000年1月2日、敗血症で急死した。

その1週間前、私は芹田さんや草地さんたちと酒を酌み交わしながら議論する席にいたが、草地さんは3日前に津波被害のパプアニューギニアから帰ってきていて、「どうもそこで虫に刺されたらしい。体がだるい」と言っていた。その無念を村井さんが引き取り、被災地NGO協働センターの力強い歩みになっている。

たまたまの不在、あるいは偶然揺れの少ない場所に住んでいて、生き残った側に回った人たちには、みんなと同じ運命を共有できなかった後ろめたさが残っている。

親しい人を失った人たちは、心的外傷後ストレス障害（PTSD）を受けることがあるが、震度7の体験を共有しなかった人たちにもストレスが発生したのではないだろうか。

ここに名前をあげた人たちは、エネルギッシュな活動をしながらも細やかな感受性を持っている人たちだ。ストレスがたまれば、酒やスポーツで発散させるという手もあるが、生き残った者としてのミッションを発見し、人を救う使命を果たそうとしている。

後ろめたさというと、約束を守らなかったこととか裏切ってしまったという背任の暗さがあるが、運命を共にできなかった後悔の念でもある。

被災地で広がった助けあいの気運の基礎には、こうした後ろめたさをわびる気持ちもあったと思われる。後ろめたさは、新しいミッションを授けてくれた力でもあったのだ。

「春の元気祭り」

■大谷　成章（おおたに・しげあき）1939年但馬生まれ。元神戸新聞記者。震災当時は月刊神戸っ子編集者。その後、フリーライター。『阪神・淡路大震災10年』（共著、岩波新書）など。

帰らぬ人形

出石 アカル
絵・菅原洸人
題字・六車明峰

「お兄ちゃん、わたしカフェオレ」

「お兄ちゃん」とは誰のことでもない、わたしのことである。還暦過ぎたわたしに向かってこの人は、今でも「お兄ちゃん」と呼ぶ。

前号で少し触れたが、わたしは昔、米屋をしていた。しかも死んだ父を継いだのが17歳だったので、恐らく当時、日本一若い米屋だったと思う。この人は、その頃からのお客様で、ずっと「お兄ちゃん」である。

明石陽子さん80歳。この人が顔を見せると、店内がパッと明るくなる。ご主人を13年前に亡くし、今は気ままな一人暮らし。いつも笑顔を絶やさず、苦労のかけらも見せない陽気な人である。趣味の書道に、ボランティア活動にとあきれるほど元気。昔なら80歳の女性は老婆と表記されるのだろうが、この人はおしゃれな帽子を被ったりして若々しい。

この底抜けに明るい人から意外な話を聞いた。

巾60㎝あずき色の、この店のカウンターを挟むと、人は心の奥に秘めていることを、つい漏らしてしまうものらしい。

「お兄ちゃんやから言うけど、初めて話すけど、わたしこれでも昔は苦労したんよ」

他のお客さんのいない夕刻である。外が暗くなり始めて、天井の照明に、スプーン、ミルクピッチャー、グラスなどの光り物が輝きを増し、店は昼間とは違った雰囲気を醸し出す。

「わたしの実の父は、石川白鳥というペンネームで映画の脚本を書いてたんよ。髪はオールバックで、いつも着流しで、わたしの知りたいことは何でも教えてくれて、カッコ良くて、わたし大好きやった。父の原作・脚本の映画では『帰らぬ人形』とか『山中小唄』ていうのがヒットしたらしいんやけど、そのうち売れんようになって来て、貧乏してたみたい。それで、わたしが9歳の時に、お祖母さんが見かねて母を田舎へ連れて帰ってしまって、しばらく父と子ども4人とで暮らしてたんよ。まあ、わたしら子どもの知らないもっとほかの事情もあったんやろけどね。ある日、父が『お母さんを呼びに行こ』と言って、わたしら子どもを連れて、田舎の母の所へ行ったんよ。ところがそこで、母が別の人と祝言挙げてるとこに

たまたま出くわしてね、父は知らんことやったらしくて、そっと又わたしらを連れて帰ったんよ。それで父は諦めたらしい。だけどそれからしばらくして、今度は、父が家を出てしまってね、わたしら子どもだけになってしもた。父はすぐに帰るつもりやったんやろけど、これもわたしら子どもの知らない事情があって、帰れんようになったんやろね。それで、お祖母さんが、お米やわずかのお金を持って来てくれたりしたけど、わたしが一番上やったから、弟らの面倒見たらなあかんし、下の妹はまだ乳飲み子やったからミルクを飲ましたらなあかんし、学校へもその子をおんぶして行ったんよ。そんな生活を二、三ヵ月したころに、ヒョコッと父が顔を見せてね。ああ良かったと思たけど、ちょっと会いに来ただけで、わたしらの服やら靴やらを置いてまたすぐ出て行ってしまったんよ。

わたしは父のことが大好きやったから、ついて行きたかったんやけど、嵐電の等持院駅でわたしのおかっぱ頭をなでながら『陽子、ええ子にしときよ。きっと迎えに来るからな』と言って、そこで別れたんよ。それからはずっと、いつか父が迎えに来てくれると思て暮らしてたけど、結局それが父の姿を見た最後やった。ある日、駄菓子屋の前で、店に人がおらん時、もうちょっとで万引きしかけたことがあったんよ。わたし今でもその光景をありありと思い出すんよ。ひもじくてひもじくて、そこに有るキャラメルがおいしそうで、もうちょっとで手が出かけたんやけど、思い留まったんよ。父の『ええ子にしときよ』ゆう言葉思い出して。あの時、手ェ出してたら、わたしきっとその後の人生変わってたと思う。そんなころ、近所でウロウロしてる、おウメさんていう乞食のおばちゃんに声をかけられて、お菓子もらったことがあった。わたしの顔見たら、くれはった。わたしのこと知ってたんやろな。

わたし、お乞食さんに恵んでもらってたんよ」

明るく屈託のないこの人に、そんな過去があったとは想像もしなかった。

「それから、わたしらは母の所へ引き取られたんやけど、わたしはどうしても、教養のない義理の父親を尊敬できなくて、馴染めなくて、『お父さん』とは呼べなかった。母も、『あんたはお父さんに似てるから』とわたしのことを好きではなかったようで、辛い日々やった」

それから十年、父からは何の連絡もなかったのだと。しかし、いつか迎えに来てくれると信じて頑張ったのだと。だけど、

つづく

■出石アカル（いずし・あかる）一九四三年兵庫県生まれ。「風媒花」「火曜日」同人。兵庫県現代詩協会会員。詩集「コーヒーカップの耳」（編集工房ノア刊）にて、二〇〇二年度第三十一回ブルーメール賞文学部門受賞。

《神戸異人館物語》

夜明けのハンター

三条杜夫
絵・谷口和市

ハンター肖像

執念の看病

エドワード・チャールズ・ハンターの生まれ故郷、アイルランドの北端・ロンドンデリーに伝わる歌があった。それは子守歌ともいえるものであったが、母が何かにつけ口ずさんでいたことを久しぶりにハンターは思い出した。

「オウ、ダニーボーイ・・・」

歌がひとりでに口をついて出た。薬を調合しながら、ハンターは懐かしい故郷の子守歌のメロディーをなぞる。チロチロと燃える菜種油のランプの光の向こうに、母の顔が目に見えるようだ。

「マミー、元気デスカ?」

そっと、言葉にしてみた。わずか十五歳の我が子を遠い異国に旅立たせる母親の心境はいかばかりであったろう? 故郷を遠く離れて、しかも十年も経った今になって初めて母の気持ちが分かる。青雲の志に燃えて国を出た自分はいい。手塩にかけて育てた親にしてみれば、かわいい息子を送り出すのはたまらなく辛いことだったに違いない。

「マミー、マミー・・・」

ハンターは薬の調合を続けながら、目頭を熱く

した。ついぞ呼んだことのない母をそっと呼んでみた。娘の愛子を病気で死なせようとしている平野常助商店の主人夫婦の気持ちが痛いほど理解出来る。故郷の母の声が頭の中に聞こえる。

「助ケテアゲナサイ」

母はそう言っている。オーストラリア、香港、上海を経てやって来た日本。横浜を経て、今、ここに根をおろそうとしている十年の歳月を経過した自分自身を改めて実感するハンターであった。

薬種問屋・平野常助商店の娘・愛子が久しく忘れていた人間らしい感情を呼びさましてくれた。その愛子の命を救うために、ハンターは必死になっている。はるばる英国から届いた医薬品のすべてを吟味して、選び抜いた何種類もの医薬品を調合し、愛子の病状がどのように変化しようとも対応出来るように万全の準備を整えるのであった。

翌朝、雨は上がった。久しぶりに秋晴れの空が広がっていた。留吉、タネ、稲次郎、キルビーが見送る。

「日本の男はね、ここ一番という時には自分を犠牲にしてでも、立派な働きを見せるものです。日本びいきのハンターさんだ、おいらが言わなくともがんばってこられることでしょうが」

留吉が激励する。無骨な男が自分なりに精一杯気のきいた言葉を贈った積りだ。

「ビジネス抜キデ人ヲ助ケルコトモ大事ナコトデス。ベストヲ尽クシテアゲナサイ」

キルビーが握手で送り出す。

「ハンターさん、いい知らせを待っていますからね」

タネが女らしい言葉を添える。

「ハンターさん、グッドラック！」

稲次郎がとっておきの英語の一言を投げる。

「サンキューベリーマッチ。愛子サン命助ケタラ帰ッテキマス」

愛子の病状しだいでは、回復の目途がつくまで大阪にとどまり続けてでも看病を続ける覚悟のハンターだ。

明治元年の交通手段といえば、自分の足で歩くことと、船に乗ることだった。馬車が誕生してはいたが、気軽に利用出来る交通手段にはまだなっていない。大阪まで出かけるには最近、帆掛け船に代わって就航したばかりの小型蒸気船を利用するのがいちばん便利だった。タネが作ってくれた握り飯の昼食をほおばりながら、大阪湾の船上で、ハンターは何としてでも常助の娘の命を救おうとあれこれ思いをめぐらせていた。

大阪に上陸すると、ハンターはまっすぐ平野常助商店を目指した。

「ハンターさん、お待ちしとりました！。お嬢さん、生きてはりまっせ」

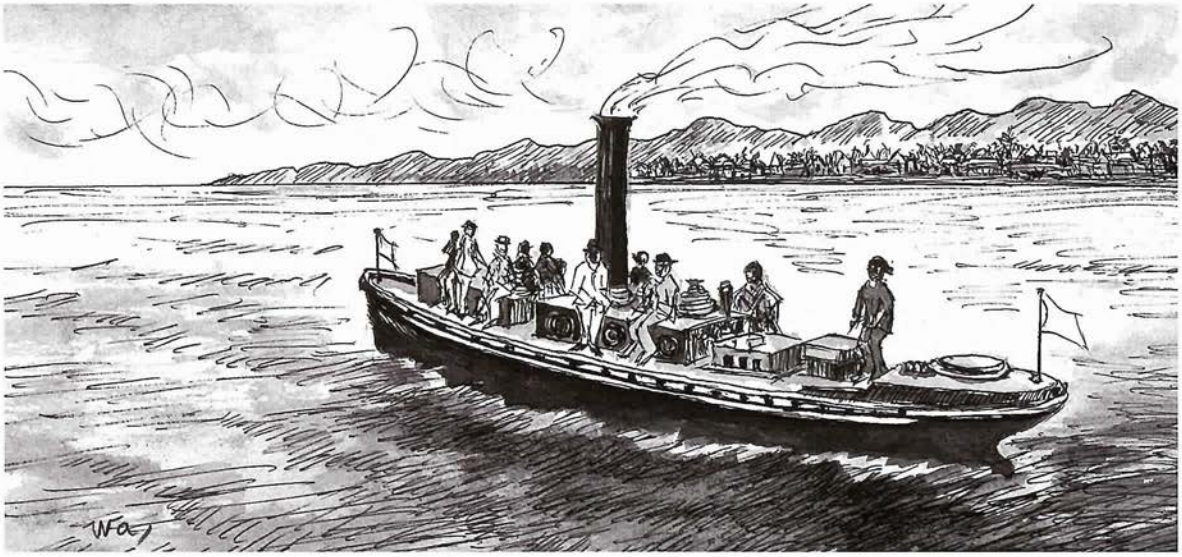
ハンターの姿を見るなり、番頭が喜びの声をあげた。

「ミス愛子、大丈夫デスカ？」

靴を脱ぐのももどかしげなハンターに、番頭が報告する。

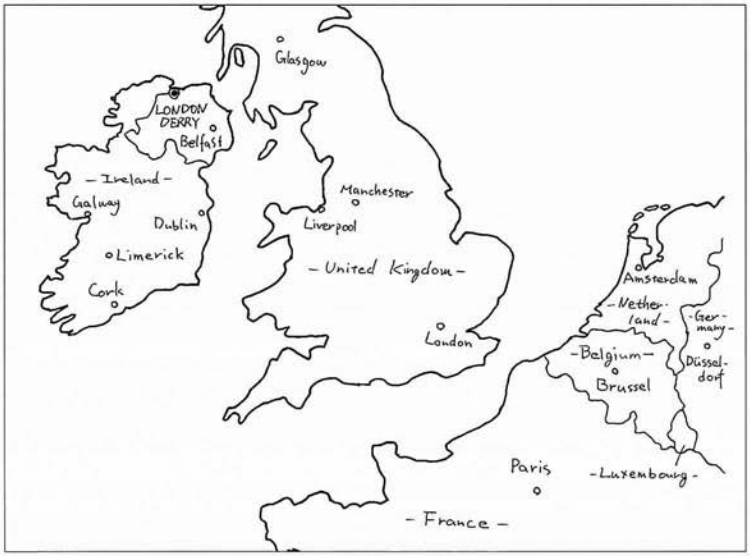
「ハンターさんの薬、よう効きます。熱が下がりました。主人も奥さんも、働いてるみんなも大喜びですわ、ハンターさんを神様みたいに思うてま

っせ。今日は何かまた薬、持って来てくれはりましたか？」
「モチロンデス。私ノ智恵ノスベテ絞ッテ新シイ薬調合シテキマシタ。スグ、ミス愛子ニ飲マセマショウ」
　離れの座敷のふとんに寝ている愛子が死なずに生きていた。医者から見離されていた愛子が、ハンターの薬によってちゃんと生きていた。しかも、高熱が下がったという。
　ハンターが来たことを知って主人の常助がすぐに顔を出した。
「ハンターさん、おおきに！」
　常助は畳に額をこすりつけんばかりに、丁寧に礼を述べた。
「ハンターさんが呑ませて下さった薬のおかげで娘が命を取り留めましたんや。ほんまにおおきにです。ハンターさん、無理ついでに、この調子で娘をもっと元気にしてやっていただけませんか？」
「OKデス。私、ミス愛子キット助ケテミセマス。ソノ積リデ私来マシタ」
　愛子はどうやら最悪の事態は切り抜けたもようである。
「ヨカッタデス。シカシ、勝負ハコレカラデス。何トシテモ私、ミス愛子元気ニシテミセマス」
「ハンターさん、ほんとによろしくお願いします。お礼は出来るだけのことをさせていただきますので」
「オ礼ヨリ命ヲ助ケルコトガ先デス」
　ハンターは昨夜、寝るのも惜しんで調合してきた薬を愛子の口にふくませる。ハンターの指が愛子のくちびるに触れると、愛子がかすかに目を開けた。
「あ、ハンターさん、あ、りがと・・・」
「ダイジョーブ、ミス愛子。今日ハモットイイ薬作ッテキマシタ。キットヨクナリマスヨ」
　やさしく気を使いながらたくみに薬を愛子の口にふくませていく西洋人の姿をまるで魔法でもなかめるように番頭や丁稚が遠巻きに様子をうかがう。
　この時、常助は四十六歳。二歳姉さん女房の菊子との間に長女・愛子を筆頭に三人の女の子と一人の男の子をもうけていた。菊子も遠慮がちに姿を見せて、ハンターに頼み込む。
「何かご入り用の品がありましたら何んなりと言うとくれやす。愛子のことくれぐれもよろしゅうにおたのみ申します」
　いつの間に勢揃いしたのか、愛子の妹や弟が神妙な面持ちで、母親の横からハンターのようすを伺う。
「ほれお前たちからも、お姉さんのことハンターさんによ～くお願いしなさい」
　母親にうながされて、子供たちはいっせいに畳に額をこすりつけて深々とお辞儀をする。
「ハンターさん、お姉さんのこと、よろしくお願い致します」
　日本流の挨拶にハンターは笑顔を返しながら
「今イチバン大事ナ時デス。ミンナノ気持チ一ツニ合ワセテ、ミス愛子、助ケマショ」
　珍しい洋服姿の青い目の外国人が、平野家のみんなには本当に頼もしく感じられるのであった。



「私、ココデミス愛子看病シマス」
ハンターは座敷の端に進むと、正座して言った。その言葉を受けて、番頭が丁稚たちに言って聞かせる。
「いとはんの命を助けられるのはハンターはんしかいてはれへん。みんなもハンターはんの手足となってお役に立つように、たのんまっせ」
「へい。何なりと言うて下さいませ」
めったに同席できない異人と一緒になって店のいとはんを助けるのだと思うと、丁稚たちの気合いも入る。また、愛子の妹や弟は、姉の愛子がこんなにもみんなから大切にされていることを肌で感じて、今さらながらに、老舗の家の子供として生まれて来た喜びを実感するのであった。
愛子が寝ている座敷の様子を誰もが伺いながら仕事や用事を進める。愛子救命活動の中心的存在のハンターは座敷の一角に身を置いたまま、たじろぎもせず、愛子を見守り続けている。洋服を着た西洋人ながら、そのさまはまるで、瞑想にふける禅僧のようでもあった。

時が静かに流れた。障子に影を落としていた庭木の枝がいつしか消えると夕暮れになった。
「ハンターさん、主人が母屋までお連れするようにとのことです」
丁稚が連絡に来た。
「晩ご飯を食べてもろうて下さい言うてはります」
ハンターは愛子の様子を見る。安らかに眠っている。細菌をやっつけるヨーロッパの薬が効いているようだ。この分だとハンターが席を外しても



問題ないだろう。

母屋の奥座敷で、常助の妻の菊子が三つ指ついてハンターを迎える。

「ハンターさん、このたびは本当にありがとうございます。晩ご飯をどうぞ召し上がって下さい」

使用人が複数いるにもかかわらず、菊子はハンターに感謝を伝えるべく、自ら彼のために夕食をこしらえたのであった。菊子にご飯を茶碗によそってもらいながら、ハンターがぽつりと言う。

「私ノマザー、ミス愛子命助ケナサイトロンドンデリーデ希望シテイルト思イマス。長イ間忘レテイタマザーノコト、愛子サンガ思イ出サセテクレマシタ」

「お母さん、遠い海の向こうでハンターさんのこと心配してらっしゃることでしょうね」

菊子は国は異なっても、同じ母親として子を思う気持ちがわかるような気がするのである。まして、遠い遠い異国に生きる息子を案じる母ごころはどんなであろうと、菊子は思うのであった。

「私ノ夢ノタメナラト、マザー、私ヲ送リ出シテクレマシタ」

「お母さん、寂しかったことでしょうね」

「・・・・・・」

ハンターは言葉を詰まらせた。自分のことで思いがいっぱいで、これまでほとんど母親や父親の気持ちなど考える余裕がなかった。ハンターの父はジョーン・ハンターと言って、ロンドンデリーの港町で、つつましやかな家庭を築いていた。庶民の中に埋もれるようにひっそりと暮らしてきたが、どういう風の吹き回しか、息子が大航海に出ると言い出して悩み抜いた。結局、息子の意志を尊重して、オーストラリア行きの帆船に乗り込んだ息子を見送ったのであった。

「香港カラ上海へ、そして日本ニ移動シテ、今、兵庫デ暮ラシテイルコト、ペアレント、知リマセン」

この時点では郵便制度はまだ生まれていないので、消息を気軽に知らせることも出来なかった。

「せっかく、故郷を出てきたのですから、ハンターさんの夢が叶えられるといいですね？　どんな

夢なのか、良ければ教えて下さい」
「日本ノ暮ラシヲ豊カニスル色々ナビジネスヲ始メルコトデス」
「もし、私たちでお役に立てることがありましたらおっしゃって下さいね」
　菊子は持ち前のやさしい気持ちで心のままを表現したまでだが、後々、本当に平野家がハンターを応援する関係になろうとは、この時は、菊子もハンター自身も全く知るよしもないことであった。
「ハイ、ソウイウ時ハ、ヨロシクオ願イシマス」
　社交辞令としてハンターはそう返したが、本心から、この菊子という日本女性に自分の母親代わりのような気持ちで甘えてみたい思いにもかられるハンターであった。
「鯖の味噌煮にしました。ちぬの海にまわって来る鯖が今旬です。ハンターさんのお口に合いますかしら？」
　菊子が手作りの料理を勧める。
「旬？　ベストシーズン？　ジャパニーズフィッシュ好キデスシ、味噌モ好キデス。アリガトゴザイマス。イタダキマス」
　ハンターは合掌して、箸を手にする。箸の使い方もすっかり上手になっている。

　平野家から少し北東に歩いたところに、慶長二年に建立された東本願寺津村別院があった。慶応四年一月に官軍の本営・大坂鎮台がそこに設置され、同九月に明治元年となるにおよんで、大阪府庁と変わり、後藤象二郎が大阪府知事に就任していた。知事は川口居留地の形成に備えて西洋料理店が必要と考え、外国判事の五代才助の力を借りて、長崎で西洋料理店を営んでいた草野丈吉を呼び寄せて外国人に食事と宿泊を提供する「自由亭」という店を最近開かせていた。
　ハンターはそこに宿泊した。朝、平野商店に出かけると、夜、「自由亭」に戻る。そんな毎日が何日か続いた。
「よろしければ、うちに泊まっていただけませんか？」
　ホンネで菊子が申し出たが
「外人アイテノホテル、オープンシテイマスノデソコニ泊マリマス」
　と、けじめを付けるハンターだった。
「モシ、ミス愛子ニ困ッタコトアレバ、イツデモ私呼ビニ来テ下サイ。夜中デモスグニ駆ケツケマスカラ」
　と付け加えて。このようなハンターの献身的な働きが効を奏して、愛子は死にかけていた病を克服して、元気を取り戻したのであった。

つづく

■三条杜夫（さんじょう・もりお）
フリーアナウンサー、放送作家。ルポライターを経て、放送業界へ。経験にもとづく地域活性化講師としての活動も評価されている。著書に「いのち結んで」、「宝の道七福神めぐり」、「そうゆう人たち」など。

注：大坂は、明治元年五月二日大阪府誕生を機に、それまでの大坂を大阪と改めました。当小説では歴史的事実に沿って、大坂と大阪を使い分けて表記しています。

田﨑俊作は昭和20年、海軍兵学校に入学
第77期生、最後の兵学校生として学んだ

終戦までわずか4ヶ月間ではあったが
この体験はのちの田﨑の生き方に
大きな影響を及ぼすものであった

海からの贈り物・真珠とともに生きる

日本の真珠王

~King of Pearl~ Syunsaku Tasaki Story

田﨑俊作物語〈第二話〉

漫画：佐藤晴美

昭和16年、
太平洋戦争勃発
戦時下において
日本の多くの少年は
将来軍人になることを
夢見た
・・・
田﨑はとりわけ
海軍士官に憧れた

旧制大村中学校
海軍兵学校を受けようと思います
お前の成績では無理だ
・・・
少し楽な予科練なら何とかなるかもしれないが…
先生はおれの本当の実力を知らんのや
田崎は先生の勧めを断り海軍兵学校を受験した
そして合格発表の日
あっ
ボ
ボ
ボ

兵学校から
合格の電報が
きたよ！
ええっ、
本当！

ただいまッ

合格通知が
神棚に
捧げてあった

うちの息子が海軍兵学校に合格したんじゃ！

乾杯じゃあー！

合格の知らせに田﨑の父・甚作も多いに喜んだ

乾杯ーッ！

!!!!!!

!!!…

オヤジ…

昭和20年4月
田﨑俊作
海軍兵学校に入学

海軍兵学校生活の規律正しさ厳しさは有名である
朝だ!!
起きろ!
朝起きて寝具をたたむまで1分30秒と決まっていた
ザッザッ
チャッ
下級生の指導はすべて上級生が行なった
田崎ちょっと来い
——はい

お前、さっきオレが部屋を出る時ドアを閉めていけと言ったのに閉めていかなかったな
――聞こえませんでした
オレがあんなに大声で言ったことが聞こえんとは何事だ！
聞こえませんでした
聞こえたはずだ！
いえ、聞こえませんでした
聞こえたはずだ！
聞こえませんでした
聞こえたはずだ！
――・・聞こえました・・・
面倒だ…
そうだろう・・よーし足を開いて歯を食いしばれッ

田﨑はのちに回想する
「この制裁は途中で
真実を曲げて言葉を
ひるがえした人間の
もろさに対するもの
だったのだ」と

この経験は自分の
信念を持ち続けると
いう田﨑の
経営者としての理念に
つながっていった

泣くな
殴られてもどうと
いうことはない

田﨑

田﨑

痛いからじゃない
自分の優柔不断さに
悔しくて
涙が止まらなかった

兵学校の同期生は
きびしい訓練を共に
乗り越えたことにより
深い絆で結ばれていった

同期生の中にはのちに田﨑がおこした
田崎真珠株式会社に入社し
田﨑の片腕となって活躍した者もいた
―60年以上たった現在までも続く
友情も生まれた

そして昭和20年8月15日

本日正午より
重大放送がある
陛下御自ら国民に
玉音を賜う

生徒たちは全員
新しい下着に着替え
練兵場に集合した

朕ハ帝国政府ヲシテ
米英支蘇四国ニ対シ
其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨…

――？
よくわからんな

今聞いた玉音放送は
日本がポツダム宣言を
受け入れ敗戦のやむなきに
至ったということである

！

う・う…
ザワ
ザワ
日本が負けた…
く…っ

聖断に従うのが我々の使命である軽挙妄動はつつしめ血気にはやって暴動を起こしたりすることはやめろ
負けた以上はお前達には日本を再建するという役目がある

海軍の機密を守るため
教科書などは
すべて燃やされた
戦争は終わった――
田舎に帰って…
そうだなァ…
庭に打ち水して
そうめんでも食うと
うまいだろうな
これから我々は
沖縄に向かって
出撃する！
心あるものは
続けーッ
血気にはやってはならんぞ
・・・・

汽車の煙で海軍兵学校の
制服は汚れてしまった
しかし田崎の頭の中には
「日本を再建するために生きよ」
という言葉が輝いていた

この後田崎は
長崎経済専門学校に入学
卒業後神戸の鄭旺真珠有限公司に
入社し真珠商への
第一歩を踏み出すことになる

つづく